

反奴隷制と感傷レイシズム——
Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin*

伊 鹿 倉 誠



“Put Away Till He Gives Up! Give It Him! Give It Him!” (1852)¹

Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly* (1852年3月初版刊、以下 *UTC*)² に展開される奴隷制廃止論は、虜囚奴隷である Uncle Tom の殉教という非暴力抵抗と、逃亡混血奴隷 George Harris が流転半生において率先垂範する、キリスト教教育を施した上で解放奴隷をリベリアに送還するというアフリカ再植民地化計画をその骨子としている。独立戦争以降も奴隷制を温存してきたアメリカは、移住を強制してきたアフリカ人に道徳的成熟への通過儀礼を提供する地理的空間として設定されている。こうした小説枠組は、奴隷制廃止の気運が高まる 19 世紀中葉において黒人に関する一般的北部白人世論を反映するものであったと考えられる。言い換えれば、奴隷制廃止後のア

メロカ社会において白人優位の現状を脅威に晒すことのないように、当該作品にはキリスト教化という黒人の精神的向上とアフリカ送還という社会的疎外の和解神話があらかじめ組み込まれている。奴隷制廃止という大義を説く宗教冊子として *UTC* は、公刊第一週で 10,000 部、年内には 300,000 部の発行を記録するベストセラーとなった (Hedrick 223)。ここにその宗教的感傷によって北部白人世論を変容し、奴隷解放を〈教義より生じる正義〉と錯覚させるアメリカ文学史上未曾有の社会現象が生まれたのである。³

足掛け 5 年、62 万 3,000 人に達する戦死者を出した南北戦争が終結し、その 12 年後の 1877 年には連邦政府による南部再建が終了する。占領時代の黒人優遇策に対する保守反動として南部諸州は、自由黒人や解放奴隷を二等市民に貶める、所謂 Jim Crow 法を相継いで可決し、1960 年代までこの人種差別法は存続する。他方 20 世紀モダニズム批評から感傷の正当性を疑われた *UTC* は、諷刺や誹謗の的となる運命を辿る。公刊直後の一部黒人知識階級と同様トムの信仰心を奴隷制への「自発的降服」と見なす読者には (Banks 223-24)、*UTC* の感傷文学パワーと文化機能を想像することすら困難であろう。

1980 年代に入ってそれまで大衆文学として軽視されてきた *UTC* の再評価が本格化する。Jane Tompkins は「女性による、女性のための、女性について書かれた」感傷小説の典型として *UTC* を取り上げ、キリスト教救済論・予型論に基づく政治社会変革エネルギーが認められると主張する。さらにこの研究者は、Nathaniel Hawthorne や Herman Melville には見られぬ女性の視点に基づく父権社会批判とアメリカ文化再構築の企図を読み解いている (124-25)。*UTC* は確かに深遠な哲理や文学的含蓄を欠いているが、感傷を巧妙に操作することによって同時代男性作家より激しいアメリカ社会批判を一面において成し得たのである。しかし奴隷制廃止のためにストウが呈示する神学的恐怖には、善意に基づく創作意図にも拘わらずレイシズムが潜んでいる。その驚嘆すべき一般大衆の支持の下に、*UTC* の偏見に満ちた黒人ステレオタイプは 20 世紀中葉まで生き永らえる。⁴ Eric J. Sundquist は、キャンノン再編によって *UTC* がアメリカ文学主潮に位置付けられようとも、当該作品のレイシズムや歪曲した文化イメージを軽視してはならないと警告する (4)。

本稿では、まず *UTC* において反奴隷制とレイシズムが共存する矛盾をストウのキリスト教道徳至上主義の観点から分析する。次いで、奴隷制廃止を掲げながらも読者に感傷を強要するという、*UTC* に特有なく奴隷制の二重構造に

ついて考察する。その際問題となるのは、被抑圧者への共感を喚起するために憐憫対象である黒人奴隷主体が消去されるという自家撞着である。本稿の結論として、こうした根本的矛盾を孕む感傷レイシズムによって奴隷制廃止論に感情的に賛同する 19 世紀中葉の読者には、その同意に当然伴う政治責任を回避する退路が開かれていることを導きたい。

1 *Uncle Tom's Cabin* の反奴隷制とレイシズム

不正に虐待される全ての被抑圧者に伸びる「善意の手」や「人間に対する善意」というキリスト教の大いなる基調和音^{マスターコード}(7) というイメージが「序文」に散見されるように、ストウのキリスト教信仰は「神の意志」への絶大な信頼に依拠している。*UTC* は「神の意志」と人間との絶対的な交渉の場として設定されているのであり、それだからこそ聖書が持つ感化力と同質の文学パワーを有するに至ったのである (Kazin xvi)。奴隷制を究極の悪徳と見なすストウにとって、「正真正銘のキリスト教徒であるか否か」が登場人物の人間の価値を決定する絶対条件となる。したがって *UTC* には、救済される者と永遠の断罪を受ける者の二通りの人物像しか基本的に登場しない。

奴隷制下の主従関係にあってキリスト教徒だからこそ主人との約束を遵守するトムには、奴隷生活の現実的諸相ではなく、キリスト者の理想像が描かれるのみである。そこで、一切の我欲を捨て去る「正真正銘のキリスト教徒」としてトムが虐殺されるまでの足跡を手短に辿ってみよう。借金返済のために自分を手放す主人 Arthur Shelby に向かってトムは、“... And now I jist ask you, Mas'r, have I ever broke word to you, or gone contrary to you, 'specially since I was a Christian?” (69) と誇らしげに問い質す。深南部へと売られて行くトムの終着点は「悪魔のような」(“diabolical,” “fiendish” 393) Simon Legree の農場であり、そこでこの敬虔な奴隷は退廃的な生活を送る黒人同胞に神の福音を説く。ラグリーの情婦 Cassy は自由獲得のために主人殺害と奴隷解放をトムに相談するが、彼は“... The Lord has n't called us to wrath. We must suffer, and wait his time” (437) と言って押し止める。そしてキャスィらに逃亡計画を提案する。逃亡奴隷捜索に荷担することを毅然と拒否するトムは、ラグリーの怒りを買って激しく鞭打たれ瀕死の重傷を負ってしまう。二日後トムを買い戻しにラグリー農場を訪れたシェルビイ家の後継息子に向かってトムは、“O, Mas'r George! what a thing 't is to be a Christian!” と重々しく囁いた後に「征服者の表

情」を浮かべて死ぬのである (461–62)。

ここで、トムが完全無欠なキリスト教徒として神に召される歓喜と、^{スレイヴ・ナラティブ} 奴隷体験記作家 Frederick Douglass が取る反抗的態度を比較検討してみよう。「蛇」(92)と綽名を付けられる抜け目なく残忍な奴隷調教師 Edward Covey との二時間に及ぶ格闘を「奴隷人生行路の転換点」(104)と述懐するダグラスは、その勝利の瞬間を「奴隷制という墓から自由という天国への栄えある再生」(105)と書き記す。いずれの場面もキリスト者の殉教とイエス再生を彷彿させる点において宗教的ではあるが、各々が企図する効果は大いに異なる。暴力による抵抗という叛逆行為に宗教的妥当性を裏付ける元黒人奴隷作家とは違い、白人作家ストウはトムの非暴力抵抗を抽象的な宗教上の至福感に擦り替えている (Bellin 280–81)。つまり *UTC* という反奴隷制テキストは、奴隷制に対する勇猛果敢な抵抗運動を恣意的に忌避し、痛苦に耐えながらいつ到来するかも定かでない〈審判の日〉を待ち続ける宗教道徳判断に依拠している。

トム同様に敬虔なキリスト教信者 Eliza の場合、4分の1混血奴隷のためにある程度の自由が保障されている。シェルビー家において実の娘のように養育された美貌の混血女奴隷は、奴隷身分ゆえに主人 Tom から不当な処遇を受け憤懣を漏らす混血奴隷の夫ジョージに、“I always thought that I must obey my master and mistress, or I could n't be a Christian” (26) と言う。ところが、幼い一人息子がトムと共に売却されることを知るや、この主人に忠実で信心深いイライザは Harry を抱いて決死の逃亡を躊躇なく試みるのである。イライザは混血キリスト教徒であると同時に母親でもあることが強調され、これらストウ流キリスト教道徳のプラス属性は、女主人 Emily がこの信頼を裏切り逃亡した奴隷母子を弁護する根拠になっている——“... I have talked with Eliza about her boy—her duty to him as a Christian mother, to watch over him, pray for him, and bring him up in a Christian way. ...” (45, 下線引用者)。そしてこの熱心なキリスト教徒にして黒人奴隷シンパの口を介して、作者の奴隷制廃止思想が吐露される。

“This is God's curse on slavery!—a bitter, bitter, most accursed thing!—a curse to the master and a curse to the slave! I was a fool to think I could make anything good out of such a deadly evil. It is a sin to hold a slave under laws like ours,—I always felt it was,—I always thought so when I was a girl,—I thought so still more after I joined the church; but I thought I could gild it over,

—I thought, by kindness, and care, and instruction, I could make the condition of mine better than freedom—fool that I was!” (45–46, 下線引用者)

執筆に当たりストウが想定した読み手は「洗練されたキリスト教徒の読者」(“our refined and Christian readers” 85)である。奇跡のような神意によって奴隷制南部から逃亡してきた黒人奴隷が北部に求めるものは、まず「避難所」であり、そして「教育と知識とキリスト教」であると作者は断言する(490)。だがこうしたキリスト教人道主義に基づく逃亡奴隷支援と、借金返済のため黒人奴隷の売却を決断する以前の安寧に満ちた奴隷生活を保障するシェルビイ家の温情主義(「親切に世話し教え導いて、彼ら奴隷を自由の身にするよりもっとよい状態にできる」)は、本質的に大同小異ではなからうか。

黒人娘 Topsy は、“I spect I grow’d. Don’t think nobody never made me” (271) と言ってキリスト教の神を拒絶する。⁵ この黒人異端児と Evangeline St. Clare は、アフリカ人とサクソン人の対蹠的文化タイプとして紹介されている。その画一的類型描写には作者の覆い難いレイシズムが露顕する。

There stood the two children, representatives of the two extremes of society. The fair, high-bred child, with her golden head, her deep eyes, her spiritual, noble brow, and prince-like movements; and her black, keen, subtle, cringing, yet acute neighbor. They stood the representatives of their races. The Saxon, born of ages of cultivation, command, education, physical and moral eminence; the Afric, born of ages of oppression, submission, ignorance, toil, and vice! (275–76)

この箇所には、正邪、文明と無知、そして支配と従属といった対立項目群と共に、神と悪魔を意味する白と黒の色のシンボリズムが呆れるほど無頓着に書き込まれている。ストウの黒人観は、異端であるアフリカ人がそのアフリカ的特質を抑制すれば救済可能であるという環境決定論である。イヴァンジェリンがトプスイを改宗させる場面は、「天上の愛の光が異端の魂の闇に差し込」んで「罪人を改心させようと屈み込む輝かしい天使の絵さながら」(315)と形容される。しかし如何に宗教画のように美化されようとも、イヴァンジェリンの立居振舞は、文明社会から隔絶した未開のアフリカ人を啓蒙すると称して植民地主義運動に荷担したキリスト教宣教師らの欺瞞的行為と重なり合う。イヴァンジェリン主導によるトプスイの改宗が表象しているのは、〈神の意志〉を隠れ蓑にす

る他民族文化の蹂躪行為に他ならない。奴隷制廃止を〈神の意志〉として絶対視するストウのレトリックは、白人キリスト教徒には有効であったであろう。しかしストウが再三再四繰り返す〈神の意志〉は、奴隷制廃止運動に賛同する白人の根強いレイシズムを隠蔽する口実となっている。⁶

2 〈奴隷制〉の二重構造：感傷による奴隷主体の消去

UTC の感傷について考察するために、文学批評におけるセンチメンタリティの定義を幾つか挙げてみよう。「通常の倫理的知的判断を誇張された思慮のない感情に置換するために、特定の状況に対して不適切な感情反応を誘発する作用」(Holman 411)という規定や、「不正確で過剰な感情のみならず、自己欺瞞、そうあればなあという願望ゆえにそうであると信じ込む身勝手の意味する」(Horton and Edwards 194)という解説もある。いずれにしても感傷は反知性文学様式であると認識されている。*UTC* は、こうした感傷特性が要因となって文学史上の位置付けや評価が不安定にならざるを得ない。

ストウの声は物語の余白とも呼べる安全地帯に留まっている。しかし作者による注解や論評だけでは単なる説教になってしまう虞がある。そこで反奴隷制講話に耳を傾けるだけの読者の心的態度を変えるために、メロドラマのプロット様式が語りの技法として取り込まれ、読者の感情的関与が増強されるのである。Winfried Fluck は、感傷テキストが審美的距離を排除しようとし、そのためにまずテキストとの距離を読者に痛ましいものと実感させる必要があると指摘する(327)。この目的に適った文学技巧が、社会と道德の二領域を混淆し統合する〈家族〉のメタファである。イライザは女性であるだけでなく母親であるがゆえに家族離散の危機を察知し幼子ハリイを抱いて逃亡する。トムは父親であり夫でもあるのだが、さらに黒人と白人の〈家族〉関係を築く「アングル」という社会的役割を担っている。こうして作者は奴隷の民族性よりも社会性を強調し読者に感情的関与を間断なく要求する。そして、ひいては奴隷制存続がアメリカという〈家〉の崩壊に繋がると警鐘を鳴らすのである。しかしストウが力説する奴隷の社会道德心は、一過性の美点としか呈示されていない。ジョージ・ハリスにとって〈家〉は、「避難所」(490)の米国北部ではなくキリスト教宣教師としてその建設に献身するアフリカ版千年王国であろう。一方トムは、自分が安住すべき〈家〉を天国以外に見出そうとはしない。

ところで、平板な紋切り型の登場人物がひしめく *UTC* の中で現代読者が興

味を持つことができる人物は、トムの二番目の主人 Augustine St. Clare を描いて他にないであろう。この人物は奴隷制を憎悪しながらも奴隷所有者としてその貴族的南部農場生活を捨てきれない自己矛盾を抱えている。嘗て「万人の抗議小説」(1949)の中で James Baldwin は、プロパガンダ小説に認められる誤謬を “its rejection of life, the human being, the denial of his beauty, dread, power, in its insistence that it is his categorization alone which is real and which cannot be transcend” (22) と述べ *UTC* を痛烈に批判した。このようなストウの神学的人物分類から唯一人の例外がこの南部白人である。オーガスティンは、ストウの奴隷制廃止思想に内在する罪人と被救済者、世俗と神性、現世と永遠の二律背反を “up to heaven’s gate in theory, down in earth’s dust in practice” (261) と譬え、作者の論理矛盾を内部告発する。相反する作者の信念を不幸にも演じざるを得ないオーガスティンは、無抵抗と受動性においてトムと同等の位置付けが成されている。ところが、夭折する娘イヴァンジェリンと約束したトム解放を果たさぬまま、彼は酒場の喧嘩の巻き添えを食い急死する (351)。オーガスティンに “a dreamy, neutral spectator of the struggle, agonies, and wrongs of man” (347) と自己規定させているように、登場人物にあるべき複雑な内面心理よりも、〈神の意志〉に背く究極の悪徳である奴隷制の廃止という至高善をストウは優先させるのである。

オーガスティンは、心理的に宙ぶらりんであるからこそ *UTC* の根幹を成す現実と理想の背離を察知する。黒人奴隷と同じ立場に身を置き得る彼は、弟 Alfred が付けた蔑称 “a womanish sentimentalist” (259) を自嘲気味に認めているが、それでも「中立の傍観者」の客観的冷静さで奴隷制を分析することが可能なのだ。例えば、ニューイングランド出身の従妹 Ophelia に奴隷制の終焉とはどんなものかと質問されたオーガスティンは、以下のように答える。

“I don’t know. One thing is certain,—that there is a mustering among the masses, the world over; and there is a *dies iriae* coming on, sooner or later. The same thing is working in Europe, in England, and in this country. My mother used to tell me of a millennium that was coming, when Christ should reign, and all men should be free and happy. And she taught me, when I was a boy, to pray, ‘Thy kingdom come.’ . . . But who may abide the day of His appearing?” (260–61)

最後の一文「しかしキリスト再臨の日まで誰が待てるのだろうか」という修辭疑問文を除き、「最後の審判日」を予見するオーガスティンの言葉はストウの口調と共鳴している。奴隷叛乱を確信するオーガスティンは、暴力革命による奴隷解放を忌避する作者の負のペルソナと呼んでよい。このキリスト教懷疑論者は、UTC の宗教道徳至上主義を瓦解させてしまう危険性を具えているがために、生みの親によって鬼子として見放され抹殺されたと解釈できよう。

1840年代の欧州諸国では被抑圧者による権力者追放という、血生臭い革命叛乱が頻発している。ストウ自身も当時米国民の関心を集めるハンガリーのオーストリアとロシアからの独立戦争(1848-49)を UTC の後景に取り込んでいる。妻子と共にカナダへ逃亡途中のジョージ・ハリスが追っ手を眼前に「独立宣言」を行う雄姿を、迫害を逃れて米国に亡命したハンガリー大統領 Louis Kossuth (1802-94) に重ね合わせ(223)、同時代読者に自由を求める逃亡奴隷への心情的共感を喚起する(cf. Reynolds 154-57)。しかしライザの説得でキリスト教に改宗したこの勇敢な逃亡奴隷は、トプスイが神の否定をイヴァンジェリンによって白紙撤回させられたと同様、抑圧者からの自由独立を宣言する際に創造主としての神を崇拝することを義務付けられている——“... by the great God that made us, we 'll fight for our liberty till we die” (222)。

さて、Philip Fisher は感傷小説に見られる特徴的な時間枠組を考察しているが、その分析によれば UTC には「行為が避けられない瞬間」と「永遠に続く不可逆的な結果」の二段階の時間領域でしか出来事を描写しない特徴があるという。そしてこれは犠牲者の視点から語られる「苦悩の記録」であって抑圧者の「暴力の記録」ではないと解釈する。つまり、ラグリーら抑圧者にあるはずの動機、心理、逡巡等には作者の関心は払われず、読者は抑圧者の不道徳行為を人間化したりその罪を寛恕することを許されない(115-17)。トムの子供として神に召される歓喜は、死に至らしめる深手を負わせたラグリーさえも“... He an't done me no real harm,—only opened the gate of the kingdom for me; that 's all!” (462) と言い表す超人的な寛容さを伴う。こうして被害者の死は益々純化され神格化される。そして加害者の抑圧された虐待動機の解明や人物理解が読み手から次第に遠退く効果を生むのである。

UTC に認められる「感傷的マゾヒズム」に注目する Marianne Noble は、中流白人女性読者に共感を呼び起こす黒人奴隷が十全たる人間というより性欲の対象として位置付けられ、対象化による奴隷の人間性と精神性の認識という当初

目標を蝕んでいると指摘する(126-27)。ストウが描く〈感傷的傷〉には、奴隷制廃止という公的善に奉ずる公平無私の愛他的欲求というより、むしろ極めて個人的な性愛及び恍惚の快樂が付き纏う。これは *UTC* のクライマックスであるラグリーによる殺意を伴う鞭打ちの直前、引き摺り出されたく正真正銘のキリスト〉のトムに生じる幻聴と幻覚という形態で表出する。

The savage words none of them reached that ear!—a higher voice there was saying, “Fear not them that kill the body, and, after that, have no more that they can do.” Nerve and bone of that poor man’s body vibrated to those words, as if touched by the finger of God; and he felt the strength of a thousand souls in one. . . . His soul throbbed,—his home was in sight,—and the hour of release seemed at hand. (454-55, 下線引用者)

引用中の「打ち震え」、「指に触れられたかのように」、「脈打ち」、「解放」という字句は、自慰行為を連想させる。こうした性的言語と死後の魂の優位を説く新約聖書の引用を挿入するストウは、白人キリスト教読者の性的恍惚と黒人奴隷の被虐的拷問を密かに収斂させている。ノーブルは、被虐的快感を誘発する隷属状態に女性読者を置こうと目論む *UTC* は、作品主題のみならずその効果もまた〈奴隷制〉であると主張する。しかも作者によって強要された感情であればこそ、苦悶の表情を浮かべる黒人奴隷に性愛を含む愛情や親密さを感じてしまう違犯行為の責任を女性読者は負わなくて済むのである(144)。こうしたジェンダー解釈は、米国社会におけるレイシズムが、白人の深層心理の領域で如何にセックスの問題と関わり合っているかを明らかにする。⁷

UTC が驚くべき大衆人気を獲得した理由は、南北戦争前夜の白人読者の世情不安を考慮し、奴隷制廃止に伴う暴力革命の脅威を抑制しつつ、その懸念を打ち消すために感情と行動に関して明解で絶対的な指南書をストウが作成したということに尽きるであろう。つまり黒人奴隷には堅忍不拔の精神を、そして奴隷制に反対する白人読者には神への献身を約束させ、その報酬として奴隷制廃止というアメリカの罪の浄化を神託として説いたのである。*UTC* は、宗教道徳の見地から奴隷制の悪を誇張する一方で、アメリカ人が負うべき政治責任を必要最小限に止め、呪われた運命の悪夢からユートピアの夢へ移行する国家展望を描いた。そして19世紀中葉の奴隷制を巡る国家的ジレンマの解決策として、〈抵抗〉や〈逃亡〉ではなく、黒人主体を消去した上で〈神の意志〉へ

の〈服従〉という安全弁を提供している。

読者感情への熱烈な訴えによって *UTC* は、政治的解決に伴う内的混迷と個人責任を回避しながら、奴隷制廃止という政治行為を顕在化させる大胆な離れ業を演じている。読者個々人が行動によって社会責任を果たすべきか否かという心的葛藤に思い悩まずに済むのは、*UTC* が〈神の意志〉という西洋キリスト教社会において絶対的な世界観に基づいているからである。だからこそストウは、最終章において奴隷制が廃止されなければ、「その不正と残虐は国々に全能の神の怒りをもたらすであろう」（494）と旧約聖書の預言者のように結ぶのである。メロドラマのプロットと感傷により〈家族〉と〈家〉の秩序を肯定し、最後には奴隷制に関わる国家的難題を黒人の民族性を消去しつつキリスト教予型論によって再定義することで、ストウは *UTC* を包括的な反奴隷制の文脈に巧みに融合する。しかしながら、感傷パワーの基盤を成す類型やメタファが時代変遷と共にその文化的権威を失墜させてしまうや、*UTC* のテキストもまたキリスト教道徳秩序の呈示力を喪わざるを得なかったのである。

注

1 *Uncle Tom's Cabin; or, Negro Life in the Slave States of America* 350 頁。本書の扉には「50 枚の鮮やかな銅版画付」と謳われているが、収録された挿絵は口絵も含め 40 枚に過ぎない。なおこの Clarke 版は副題を異にするが、本文は米国版と同一である。

2 本稿では、Knopf 版をテキストとして使用する。

3 1851 年 6 月から翌年 4 月まで *The National Era* 誌に毎週連載されたことに加え、驚異的な単行本発行部数と“public reading”という当時の慣習を考慮すれば、1850 年代半ばには大多数の北部人が *UTC* のストーリーに精通していたと推察できる (Sarson 33)。

4 7 世代に亘る家系小説 *Roots: The Saga of an American Family* (1976) を世に問う 12 年前、アフリカ系アメリカ人作家 Alex Haley は、アンクル・トムを「あの時代が許容したであろう最上級の黒人奴隷造型」と認める発言をしている (23)。

5 *Mumbo Jumbo* (1972) の中で Ishmael Reed は、古代エジプトの太陽神崇拝起源の禁欲的キリスト教文化に対抗する、舞楽や性や朗笑を肯定する 1920 年代の黒人文化興隆を“Jes Grew” (6) と名付け、トプスイのキリスト教拒絶を作品主題にする。

6 Charles W. Chesnutt のパッシング小説 *The House Behind the Cedars* (1900) に登場する混血弁護士 John Warwick (本名 Walden) は、不正な事象までも「神の意志」と誇張する「独善的で狭量な偽善者」を批判する(181)。なお当該作品の語り手は、自由獲得闘争への原則的不参加を表明したトムを暗に揶揄する——“No Negro, save in books, ever refused freedom; many of them ran frightful risks to achieve it”(156)。

7 例えば、ボールドウィンの短篇“Going to Meet the Man”(1965)の冷酷な中年郡治安官 Jesse は、子供の頃父親に肩車されて目撃した、黒人を焼き殺すリンチ現場を回想しながら、妻とのセックスをやり遂げる。

参考文献

- Baldwin, James. “Everybody’s Protest Novel.” *Partisan Review* 16 (June 1949): 578–85. Rpt. in *Notes of a Native Son*. 1955. New York: Dial, 1979. 13–22.
- . “Going to Meet the Man.” *Going to Meet the Man*. New York: Dial, 1965. 227–49.
- Banks, Marva. “Uncle Tom’s Cabin and Antebellum Black Response.” *Readers in History: Nineteenth-Century American Literature and the Contexts of Response*. Ed. James L. Machor. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1993. 209–27.
- Bellin, Joshua D. “Up to Heaven’s Gate, Down in Earth’s Dust: The Politics of Judgment in *Uncle Tom’s Cabin*.” *American Literature* 65.2 (June 1993): 275–95.
- Chesnutt, Charles W. *The House Behind the Cedars*. 1900. Fwd. William L. Andrews. Athens: U of Georgia P, 2000.
- Douglass, Frederick. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, An American Slave, Written by Himself*. 1845. Ed. and introd. Benjamin Quarles. Cambridge: Harvard UP, 1988.
- Fisher, Philip. “Making a Thing into a Man: The Sentimental Novel and Slavery.” *Hard Facts: Setting and Form in the American Novel*. New York: Oxford UP, 1985. 87–127.
- Fluck, Winfried. “The Power and Failure of Representation in Harriet Beecher Stowe’s *Uncle Tom’s Cabin*.” *New Literary History* 23.2 (Spring 1992): 319–38.
- Haley, Alex. “In ‘Uncle Tom’ Are Our Guilt and Hope.” *New York Times Magazine* 1 March 1964: 23, 90.
- Hedrick, Joan D. *Harriet Beecher Stowe: A Life*. New York: Oxford UP, 1994.
- Holman, C. Hugh. *A Handbook to Literature*. 4th. ed. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1985.

- Horton, Rod W., and Herbert W. Edwards. *Backgrounds of American Literary Thought*. 3rd. ed. Englewood Cliffs: Prentice, 1974.
- Kazin, Alfred. "Introduction." Stowe, *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*. ix–xvi.
- Noble, Marianne. "The Ecstasies of Sentimental Wounding in *Uncle Tom's Cabin*." *The Masochistic Pleasures of Sentimental Literature*. Princeton: Princeton UP, 2000. 126–46.
- Reed, Ishmael. *Mumbo Jumbo*. Garden City: Doubleday, 1972.
- Reynolds, Larry J. *European Revolutions and the American Literary Renaissance*. New Haven: Yale UP, 1988.
- Sarson, Steven. "Harriet Beecher Stowe and American Slavery." *New Comparison* 7 (Summer 1989): 33–45.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*. 1852. Introd. Alfred Kazin. New York: Knopf, 1995.
- _____. *Uncle Tom's Cabin; or, Negro Life in the Slave States of America*. People's Illus. ed. London: Clarke, 1852.
- Sundquist, Eric J. "Introduction." *New Essays on Uncle Tom's Cabin*. Ed. Eric J. Sundquist. Cambridge: Cambridge UP, 1986. 1–44.
- Tompkins, Jane. "Sentimental Power: *Uncle Tom's Cabin* and the Politics of Literary History." *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790–1860*. New York: Oxford UP, 1985. 122–46.